保健体育科　学習指導案

八尾市立龍華中学校

研究テーマ：学びへのスムースな導きと、学んだことを定着させ、深めるための授業

教科	保健体育科	学年・組	第２学年１組	場所	第２学年１組教室
単元名	傷害の防止「８　心肺蘇生法」　（第１時／全２時）				
本時の目標	・心肺停止時における居合わせた人（バイスタンダー）による迅速な行動の重要性と、心肺蘇生およびAEDの仕組みや意義を理解する。 ・救急車到着までの時間経過と救命率のデータ等を比較分析し、救命処置の必要性について根拠をもって考え、表現することができる。				
本時の評価規準	【知識・技能】 ・心肺停止時の応急手当（胸骨圧迫、人工呼吸、AED）の目的や仕組み、バイスタンダーの役割を理解している。 【思考・判断・表現】 ・救命率のデータや救急車到着までの時間を根拠に、なぜ居合わせた人の迅速な行動が必要なのかを考え、説明できる。 【主体的に学習に取り組む態度】 ・次回の実技を見据え、救命処置の手順や留意点を自分事として捉え、意欲的に学ぼうとしている。				
本時の判断規準	評価の観点	A：十分満足できる	B：おおむね満足できる	支援を要する生徒へのてだて	
	思考・判断・表現	救急車の到着時間（約10.3分）や生存率・社会復帰率のデータを比較分析し、バイスタンダーによる心肺蘇生とAED使用が救命率向上に不可欠である理由を多角的に説明できる。	資料から救命率と時間経過の関係を読み取り、居合わせた人による心肺蘇生が必要である理由を説明できる。	資料1・資料2のグラフを提示し、「処置を実施した場合」と「しなかった場合」の数値の差に注目できるよう個別に支援する。	
	主体的に学習に取り組む態度	次回の実技を見据え、心肺蘇生の手順やポイント（姿勢・力加減・死戦期呼吸への対応等）について自分なりの課題意識を持って意欲的に取り組んでいる。	課題解決や対話活動に主体的に参加し、救命処置の重要性を認識して学習に取り組んでいる。	運動場で友達が倒れた場面など、身近な状況を設定して問いかけ、当事者意識を持たせる。	

１．本時のめあてと、そのねらい

めあて	倒れている人を発見したとき、なぜ居合わせた人（バイスタンダー）の迅速な救命処置が必要なのだろうか？【探究・思考型】
ねらい *教材観、生徒観、指導観を含む	【教材観】 心肺停止後、脳に酸素が届かなくなると救命可能性は急速に低下する。全国平均で救急車到着に約10.3分かかるため、その場のバイスタンダーがいかに早く胸骨圧迫やAEDを行うかが生命を左右する。数値データ（生存率・社会復帰率）を活用し、処置の根拠と仕組みを理論的に理解させることが次回実技への強い動機付けとなる。 【生徒観】 生徒はAEDや心肺蘇生という言葉は知っているものの、「大人がやること」「自分には関係ない」と他人事に捉えがちである。また「死戦期呼吸（あえぎ呼吸）」のような判断に迷う状態についての知識が不足している。 【指導観】 導入で身近な緊急場面を提示して当事者意識を揺さぶり、データ分析ワークを通して「なぜ自分たちがすぐ動く必要があるのか」を思考・言語化させる。グループでの対話を取り入れることで知識の定着と深まりを図る。

２．期待する振り返りの好例（めあてを踏まえて）

「救急車が到着するまでの約 10.3 分の間に、その場にいる私たちが胸骨圧迫や AED を行わないと、救命率が大きく下がってしまうことがわかった。呼吸の確認で『しゃくりあげるような呼吸（死戦期呼吸)』があっても心肺停止と判断してすぐ行動することが大切だと知った。次回の体育館での実技では、胸骨圧迫の位置や押し方、AED の操作をしっかり身につけて、いざという時に動けるようにしたい。」

３．単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
心肺停止時の応急手当（胸骨圧迫、人工呼吸、気道確保、AED）の意義と方法、救命可能性と時間経過の関係について理解している。	状況に応じた適切な救命処置の必要性を判断し、データや科学的根拠をもとにその理由を説明することができる。	生命の尊重に基づき、応急手当の重要性を認識して、意欲的・主体的に実技や学習活動に取り組もうとしている。

４．単元の指導と評価の計画

時	学習内容	評価の観点
1 本時	心肺蘇生の理論とバイスタンダーの役割（救命可能性と時間経過、119番通報と救急車到着時間、心肺蘇生・AEDの仕組み・判断基準）	思考・判断・表現 / 主体的に学習に取り組む態度
2	心肺蘇生法とAEDの実技実習（トレーニング人形を用いた胸骨圧迫・気道確保・人工呼吸・AED操作の一連の流れ）	知識・技能 / 主体的に学習に取り組む態度

５．本時の学習過程

	学習活動	◇指導上の留意点 〇理解の不十分な生徒への手立て	評価の観点 （評価方法）
	めあて：倒れている人を発見したとき、なぜ居合わせた人（バイスタンダー）の迅速な救命処置が必要なのだろうか？		
導入 （８分）	1. 課題の把握 ・運動場で友達が急に倒れ、呼びかけても反応がない場面を想定する。 ・「あなたならまずどう行動するか?」をブレインストーミングする。	◇身近な場面を設定し、当事者意識を持たせる。 〇意見が出にくい生徒には「周りの大人を呼ぶ」「119番する」など具体的な選択肢を提示する。	主体的に学習に取り組む態度 （発言）
展開１ （１７分）	2. 資料データの読み取りと考察 ・資料1（救命の可能性と時間経過）および資料2（実施の有無と生存率・社会復帰率）を分析する。 ・八尾市の実状にも触れる。 ・発問：「救急車が到着するまでの時間は全国平均で約10.3分。なぜ居合わせた人がすぐに救命処置を開始しなければならないのだろうか？」 ・個人思考後、ペア/グループで意見交換する。	◇「処置をしなかった場合」と「心肺蘇生・AEDを行った場合」の生存率（6.6%→12.8%→50.3%）や社会復帰率の数値差に着目させる。 ◇約10.3分間、何もしないと救命可能性が著しく低下することをグラフから読み取らせる。	思考・判断・表現 （対話内容）
展開２ （１７分）	3. 心肺蘇生とAEDの仕組み ・手順の整理 ・胸骨圧迫（人工的に血液を循環させ脳や心臓に酸素を送る）や気道確保・人工呼吸の役割を理解する。 ・AED（電気ショックで心臓の痙攣を取り除く）の役割と特別な資格がなくても使える安全性を知る。 ・注意点：しゃくりあげるような異常な呼吸（死戦期呼吸）も心肺停止の兆候であるため、迷わず胸骨圧迫を開始することを学ぶ。 ・次回の実技に向け、手順の流れ（反応確認→協力要請・119番/AED指示→呼吸確認→胸骨圧迫 ・人工呼吸→AED）を確認する。	◇胸骨圧迫の姿勢（肘を伸ばし垂直に体重をかける）や絶え間なく行う理由を視覚資料や教員の実演で示す。 〇死戦期呼吸の判断に惑わされず「正常な呼吸がない＝すぐ心肺蘇生」という原則を徹底理解させる。	

まとめ （８分）	4. 振り返りと次回実技への意欲付け ・本時のめあてに対する振り返りをノートに記入する。 ・「次回は実際に人形とデモ用AEDを使って、命を救う技術を体験・マスターします」と次回の告知を行	◇期待する振り返りの好例を共有し、実技学習（体育館）へのモチベーションを高める。	思考・判断・表現 主体的に学習に取り組む態度 （保健学習ノート）